

デイビッド・J・ディカニシ

平和教育協会
(Teach Peace Foundation)

米国・カナダ・日本・英国
(U.S.A・Canada・Japan・UK)

『長崎の秘密』のドキュメンタリーと本書は、平和教育協会 (Teach Peace Foundation) により推薦されています。平和教育協会の基本姿勢の一つは、「全ての人々に、とりわけ意見を異にする人々には、自分達の愛する家族同様に対応しなければならない」とするものです。

本書では、原子爆弾「デブ男」(訳注=長崎に投下されたプルトニウム爆弾は、その外観から暗号名で **Fat Man** 〈デブ男〉と呼ばれた) が何故長崎に投下されたのか、その真相を明らかにします。本書と関連ドキュメンタリーについては、真実に対して相対立する意見を尊重します。更に、『長崎の秘密』は、「死の血盟団」(訳注=原文では **Brotherhood of Death**) の様々な側面を暴いた一連の著書でも論証されています。

献呈の辞と謝辞

『長崎の秘密』は、素晴らしい勇気を示した二人の日本人に捧げます。伊藤一長氏は、核兵器の使用が国際法に反することを教えました。永井隆氏は、悪を封じて何千人もの人々を奮い立たせました。浦上の聖者として知られる永井博士は、「デブ男」と呼ばれた原子爆弾で殆ど壊滅させられた長崎のキリスト教徒社会の一員でした。

著者は、本書執筆にいたる調査研究の過程で援助を受けた長崎原爆資料館の笹野さくら氏らの皆さん、荒木一彦氏、**Renzo De Luca** 師、和田かおり氏に感謝の意を表します。関連ドキュメンタリーの音楽制作者 **Robert E. Bowman** 音楽博士及びナレーション担当の内田みよ氏にも謝意を表します。

伊藤一長 (1945 年 8 月 23 日～2007 年 4 月 18 日) は、長崎市長であったが、山口組系暴力団の一員城尾哲彌に背後から拳銃 2 発を打ち込まれて殺害された。伊藤の前任者本島等 (1922 年 2 月 22 日～現在) も、長崎市長在職中の 1990 年 1 月 18 日に銃撃されて重傷を負った。彼は、1988 年 12 月 7 日の長崎市議会で「(昭和) 天皇にも戦争責任はあると思う」と発言したことから非難や脅迫が続き、遂に長崎市役所玄関前で背後から近付いてきた右翼団体正氣塾幹部の若島和美に銃撃されたのである。

永井隆 (1908 年 2 月 3 日～1951 年 5 月 1 日) は、自身の被爆体験について精神的な年代記を書いている。彼の多くの著者は、英語・中国語・朝鮮語・仏語・独語など多数の言語に翻訳されている。(長崎原爆資料館玄関の標識「平和教育協会 2013 年写真集」より転載)

《 目 次 》

< 序 言 >

1. 死の血盟団
2. 不屈の都市
3. 全視眼カルト
4. キリスト教徒の迫害
5. 秘密計画
6. 朝鮮の分断
7. 暗殺一如何にして秘密が守られるか
8. 未来

< 序 言 >

第二次世界大戦が終わろうとする 1945 年 8 月 9 日の朝、長崎市民たちは、殆どがやがて起こる大惨事に全く気づかぬまま日常生活を始めた。そこには、強制労働工場の外国人労務者ら、老齢の市民たち、アメリカ等連合国抑留者収容所の戦争捕虜 400 人余りと彼等を監視する兵士達があり、彼等の多くは浦上天主堂地域周辺にいた。又、そこには子供を連れた婦女、戦時中にもかかわらず学校で授業を受けていた生徒たち、教会や寺院で会衆の慰安教導に当たっていた諸宗派の聖職者たちがいた。

本書は、何故原爆が日本に投下されたかを正確に説明する最初の物語である。この本は、真実を明らかにすることで核兵器が再び使われるのを防ぐ助けになることを希望して書かれた。まずは、この現実世界の物語を幾つかの質問から始めたい。

皆さんは、当時アメリカ政府が長崎に一万人数りの強制徴用された朝鮮人や 400 人ほどの連合国捕虜がいたことを知っていたにもかかわらず、原爆投下の目標にしたことを知っていましたか。皆さんは、1945 年当時の長崎が 500 年以上も日本のキリスト教の中心地であったことを知っていましたか。又、皆さんは、原爆の開発製造と投下使用に係わったアメリカ政府指導部が終始「死の血盟団」として知られる秘密結社の要員らで占められていたことを知っていましたか。

皆さんも、多くの人々と同様にこれらの大変基礎的な事実を知らなかったとして、以下本書の記述は、真実を明らかにすることで第三次世界大戦と核兵器の再使用を防ぐ助けになることを希望して書かれたものである。

1. 死の血盟団

「この種の秘密団体の歴史を書くことは容易ではないが、それはなされなければならない。何故なら、私が示めすように、この団体は 20 世紀で最も重要な歴史的事実の一つであるから。」(キャロル・クウィグリー＝ハーバード大学・プリンストン大学・ジョージタウン大学教授)

1945 年 8 月 9 日、広島に投下されたウラン原爆よりも更に威力のあるプルトニウム原爆が長崎市を壊滅させた時に、7 万人以上の人々の命が一瞬にして終った。この核爆発に生き残った人々の多くは、放射能被爆により更なる苦痛、疾病、そして死と直面することになる。今日に至るも、この大惨事が何故怒ったのかは殆ど誰も知らない。

米国や欧州の最も古い国々が形成される以前に、すでに組織された権力エリート集団が存在していた。その集団は、諸国の王や女王らをも支配し、彼等自身によるもの以外の境界や法規を認めない秘密結社であった。彼等は、「死の血盟団」として知られていた。

人々が様々な懸念を抱く中で、この集団は陰謀を企み謀略を図って強大化し、長年のうちに彼等の触手は世界の至る所に及ぶようになった。20 世紀までには、西洋世界の経済と政治に及ぼす彼等の影響力は非常に強大化して、社会は、選出された代議員たちではなく死の血盟団がほぼ全体的に支配するようになっていたのである。

フリーメイソンやスカル・アンド・ボーンズ (Skull and Bones は、髑髏と骸骨の意味で、米国イェール大学を拠点にした秘密結社の名称) など多くの秘密結社の要員らは、三つの世界大戦を起こす計画を立てて協力し工作した。先ず最初は 1914 年、次は 1939 年、そして三番目は何年も後に起されるものであった。彼等は、ロスチャイルド家のような王朝的銀行財閥らの莫大な財源を使って、米国と英国に自分らの邪悪な計画目的を達成するために必要な権力が与えられる内政基盤を構築した。

1942年9月13日、或る最高機密会議がサンフランシスコの北方75マイルほどの所で行われた。その会議地は、「ボヘミアン・グローブ」として知られ、「ボヘミアン・クラブ」と呼ばれる死の血盟団の偽装団体が所有する森林地の隠れ家であった。このボヘミアン・クラブは、複数の秘密結社が会合して奇怪なオカルト儀式に参加できる排他的な場所となっており、毎年7月には参加者らに「煩勞の茶毘」として知られる生け贄の儀式が行われる。なお、ボヘミアン・グローブは、これまで血盟団の幹部要員らが世界制覇のために様々な陰謀をめぐらせ計画を遂行するために開く数多くの会合の中心地になってきた。因みに、1942年9月に開かれた会議の主要な参加者は、ヴァネヴァ・ブッシュと称した血盟団役員によって統率されたS-1執行委員会の委員らであった。これらの男達は、後に日本に投下されることになる二つの原爆開発する「マンハッタン計画」の科学指導部の面々であった。

このS-1委員会は原爆の責任を負う者達と考えられるであろうが、実は、その背後に彼等を支配する格段に強力に影響力のある隠れグループが存在したのであり、このグループ指導部の一人がバーナード・バルーク (Bernard Baruch) であった。

バーナード・バルークの父親サイモン・バルークは医師であったが、アメリカの南北戦争中はロバート・E・リー將軍の幕下で南軍の軍医として務めながら同時にロスチャイルド家のスパイとして活動していた。古代からの数多くの大戦争の場合と同様に、アメリカの南北戦争も血盟団とその広範な秘密結社人脈によって操られていたのである。

バーナード・バルークの回顧録によれば、彼の一族は死の血盟団の主要な遺品とされる家族の血統が記された頭蓋骨を保有していた。バルーク一家はユダヤ人であると自称しているが、ユダヤ人であるのに人の遺骨を保有することはユダヤの律法に反しており、奇異であった。しかし、死の血盟団の信条によれば、それは交霊術ないし魔術による死者との対話に必要なのである。

もう一つ奇異な事実、サイモン・バルークが、現在も死の血盟団に仕え、忌まわしく公然と人種差別する秘密結社クー・クラクス・クランにも属していたことである。息子のバーナード・バルークは、クランの一員ではなかったにしても、隠れた権力エリート集団への父親の奉仕を引継ぎ、そこで享受できるインサイダー取引や人脈操作を通して莫大なウォール街の富を蓄財する報償を受けていた。他の多数の米国市民が所謂「大恐慌」を通して苦しんでいる最中に、彼は大いに繁栄したのである。

バルーク初期の頃の多くの任務には、米国を第一次世界大戦に参戦させる謀略活動に加わり、1918年には戦時産業局を任せられたことなどがある。1919年には、バルークは、パリ講和会議での主要参加者を務め、国際連盟の創立を主唱した。又、バルークは、多くの者たちが軍部や民間の指導的地位に昇進するのを助ける役割を果たした。アイゼンハワー大統領は、「私が25年前の若い無名の少佐であった頃に人生で最も賢明な行動を取ったのだが、それはバルーク氏に助言を求めることであった」と述べている。

第二次世界大戦が進行中の1940年代初期までには、忠実な血盟団員でありながら重要な政治家として日常の役割を遂行していたバルークや他の秘密結社要員らは、原子爆弾の使用計画を細部的に調整する作業に入っていた。

その頃ドイツでは、ヴェルナー・ハイゼンベルクと云う男が、死の血盟団の指示によりナチスの原爆開発を指導していた。1941年に、ハイゼンベルクは、コペンハーゲンに出かけて、この開発計画の進行状態を著名な物理学者ニールズ・ボーアと論議した。その後、ボーアは、ハイゼンベルクが彼に語ったことを英国人たちに警告した。ナチスの原爆が完成間近いとのハイゼンベルクの言明、即ち長年歴史の中に埋もれてしまうであろう事実があったにも拘らず、1934年には血盟団はアドルフ・ヒットラーに対する影響力を失っていた。その結果、血盟団は原爆開発を米国に移し直すことになり、結局ニールズ・ボーアが彼等のマンハッタン計画に加わるようになるのである。

バーナード・バルークは、血盟団に仕える工作要員らが原爆投下目標を決定する地位に就くのを確実にするために背後で動いた。又、彼は、広島と長崎が通常爆撃から免れるように手配した。そこで、死の血盟団に仕えるフリーメイソンのハップ・アーノルド元帥は、

1945年8月6日以前は予定された科学実験のために広島と長崎が戦災を受けないようにしておくことを他の将軍たちに指令した。死の血盟団は、原爆計画の隅々にまで深く関与しながら、単に日本の敗北だけを求めているのではなかったのである。

2. 不屈の都市

「運命は、長崎を究極の目標に選んだ。」（ウィリアム・ロー レンス）

長崎の町が1945年には日本のキリスト教の中心地であったと云う事実は、一般的に米国や西洋世界の殆どの人々に知られていなかった。歴史家ウィリアム・クレイグは、「長崎は日本のカトリック教の中心であったし、御宿りの聖母マリアは極東最大のローマ・カトリックの大聖堂であった」と書いている。その地元教区民によって建てられた大聖堂は、基本的に、1549年に当地を訪れた聖フランシス・ザビエルの教えによって改宗した人達が始めた信仰の自由を求める証しであった。長崎に対する原爆投下の際にグランド・ゼロとして選ばれたのは、まさにこの大聖堂であった。

米国海軍元帥ウィリアム・D・リーヒーによれば「対日戦争で何の実質的な利益にもならない」のに何故一都市のキリスト教大聖堂が原爆投下の目標に選ばれたのかは、初めは理解しがたいかも知れない。しかし、死の血盟団の真の意図が明らかになると、その疑問も直ちに解けるのである。

ドワイト・アイゼンハワー将軍は、こう書き残している「日本は、まさにその時に最小限の面目を保って何とか降伏できればと求めており、あのような酷いやり方で彼等を打ちのめす必要はなかったのだ」と。

ヘンリー・L・スティムソン国務長官は、1947年出版の回顧録『戦争と平和における積極的貢献について』の中で、日本政府が早くも1945年の春には「最終的に同意したのと実質的に同じ（降伏の）諸条件を受け入れる」態勢にあったと認めている。「アメリカ側がその対応を遅滞させることによって戦争を長引かせたことは、歴史を見れば分かるかも知れない」と、スティムソンは書いている。

死の血盟団にとっては、原子爆弾は当時昭和天皇が神として認められなくなった空所をキリスト教が支配するのを防ぐために必要であった。キリストの時代以降、「蛇の教団」や「新世界秩序」の名称でも知られる秘密結社「死の血盟団」の主要目的の一つは、主としてキリスト教・ユダヤ教・イスラム教など世界の主要な宗教をつぶすことであった。

1859年にトーマス・ブレイク・グラバーは、死の血盟団のために日本のキリスト教を侵害し有力大名に兵器を売りつける目的でロスチャイルド家により日本へ送りこまれた。彼は、長崎にフリーメイソン支部集会所を設置し、三菱の会社創設に重要な役割を果たした。その三菱は、第二次世界大戦中の伝説的な戦闘機ゼロ戦を含む多くの兵器を製造することになる。

歴史上では、時には、死の血盟団がキリスト教の広がりを阻止するのに成功している。しかし長崎の場合、更に驚くべきは日本全国の場合、キリスト教は伝来初期の残酷な迫害にも拘わらず19世紀末までに幾つかの教派をもって繁栄していたのである。日本では、1873年までにキリスト教は非常に普及していて、禁教の形跡は全て取り除かれ、西洋新暦が採用されていた。日本は宗教の自由地として知られるようになり、その頃には、日本人は新しい天皇の即位からだけでなくキリスト生誕からも時を数えるようになっていた。

死の血盟団は、長崎地域のキリスト教徒の増加を見て長崎を重大目標にした。原爆が開発される時までには、市内に5万人程のキリスト教徒が住む長崎は彼等の世界制覇計画にとって紛れもない脅威となるであろうから全滅させるべきだと判断したのである。原爆投下の反キリスト教目的を隠蔽するために、血盟団の工作要員らは投下後の世論工作活動を

大々的に組織した。その一例が、カトリック神父とプロテスタント牧師に原爆投下任務を祝福させるよう手配したことである。

原爆投下機の操縦士チャールズ・スウィーニーは、ルーテル派牧師のビル・ダウニー大尉が「私は、人を殺すためと殺されるために飛び立つ男達とその飛行機を祝福します。私は、彼等の行動を私の祝福によって許します」と述べたと書き記している。死の血盟団にとって、これは、様々な理由づけになる重要なことであった。彼等の信条では、人間の犠牲は力を生み出すために必要とされるが、原爆でもたらされる甚大な人的犠牲は注意深く隠蔽されなければならなかった。従って、宗教指導者たちが原爆使用に公然と反対しないように納得させる必要があったのである。あからさまな状況での人的犠牲や他の邪悪行為を隠蔽することは、「死の血盟団教」の重要な活動部分でもある。血盟団による暴力行為を究明しようとする「陰謀論者」や真実を追求する人達の殆どが理解できないことは、まさに血盟団にとってその信仰が如何に重大であるかである。

3. 全視眼カルト

「これは、私が自分で答えを出すべき質問だ。」(死の血盟団、全視眼カルト成員ヘンリー・ルイス・スティムソン)

善が悪の反対で闇が光の反対であるように、血盟団の宗教も、アブラハムの信仰上は邪悪な鏡として存在し、その中心的信条を転倒させて真実とは反対の働きをしている。キリスト教徒が創造の神の子イエスを彼等の主であり救世主であるとして崇拝するように、死の血盟団ないし蛇の教団は、闇の神を崇拝し破壊の神の所産としての反キリスト、ダジャール、を崇拝する。秘密結社への加入に際して、入会儀式を終えた会員らは、彼等の魂を破壊の神に捧げることを誓約し、その命令に従うことを誓うのである。多くの秘密結社が主張しているように、彼等の慣習と儀式はバビロンと古代エジプトの慣習や儀式に則っているので、彼等のアイコンやシンボルはしばしば古代エジプトの偶像や象徴を反映しており、その最も顕著なものが「ホルスの目眼」や「全視眼」である。

最古最大の「死の血盟団」秘密結社の公然団体は、フリーメイソン団である。フリーメイソン団には長い歴史があり、何世紀もの認証済みの公文書が証拠として存在する。米国でのフリーメイソン団の影響は、第 110 回米国議会下院決議第 33 号によっても実証されている。この決議は、当時各州に何千人ものフリーメイソン団員がいることを認め、米国憲法の制定者と署名者の大半がフリーメイソン団員であったことを記している。彼等が悪の諸行為に加担していたか否かは別として、合衆国大統領の殆どが死の血盟団の何らかの組織の成員であったことが分かるのである。

死の血盟団の信条の主要な側面は、信奉者らが与えられた秘密の知識を保持することで彼等自身を神に変身できると思うことである。これを根拠として、彼等は、地上の神として、何事においても望むことを達成するために莫大な富を得たり他者に甚大な犠牲を強いたり集団虐殺を犯すなど自分勝手な行動の規範を作り上げることができるのである。1500 年代の半ばまでには、血盟団の要員らが日本に侵入しており、その後間もなく長崎は古代ローマのようにキリスト教弾圧の地になってしまうのである。

4. キリスト教徒の迫害

長崎は、5 世紀以上もの間日本のキリスト教の中心であった。長崎を主要な原爆投下目標とするために、死の血盟団は、彼等の最大の秘密結社フリーメイソン団の要員を使用した。

1549 年に、イエズス会宣教師の聖フランシス・ザビエルは、日本へのキリスト教布教の希望を抱いてスペインから鹿児島に到着した。9 月 29 日、ザビエルは、鹿児島 の大名島津貴久を訪ねて日本で最初のキリスト教伝道所を建てる許可を求めた。この大名は、ヨーロッパとの通商関係を望んでこれに同意した。ザビエルは 1551 年に日本を去り中国へ旅立ったが、後に残った彼の信奉者らは更なる数の地元大名をキリスト教に改宗させた。

これら地元領主の間で最も有名なのは大村純忠で、彼は「キリシタン教」への改宗によって付随取引としてポルトガル船から交易利益の一部を受け取り大きな富を得たが、同時に彼自身はキリスト教に心から魅了されていた。事実、大村の「南蛮人の宗教」に対する崇敬の念は非常に厚く、家臣の武士や職人・領民ら全員に即座改宗を命じたほどであった。こうした大村の例に続いて、もう一人の有名な武士高山右近も自分が「キリストの戦士」であると宣言した。

1571 年に長崎が大村の対外常設港として開港されると、長崎は多くのキリスト教徒が日本にやってくる入り口となった。10 年以上もの間、大名の庇護下でこの新しい宗教は広く普及し、1580 年までには、長崎は「小ローマ」として知られるほどになり、大聖堂の周辺地域は「日本のバチカン」と呼ばれるほどであった。

当時日本の政界におけるイエズス会の横柄とも見られる活発な言動と南日本での多大なキリスト教の影響を懸念した秀吉は、バテレン追放令を発して宣教師全員の追放を命じ、長崎の町を直接支配下に置いた。1596 年にスペインのサン・フェリペ号が四国の沖合で難破した際に、秀吉は、その航海士からスペインのフランシスコ修道会が日本侵略の先鋒であると伝えられた。そこで、秀吉は、その年の 2 月に長崎で 26 人のカトリック信者のはりつけを命じた。これらの者たちは、後に 26 人の殉教者として知られることになる。

やがて日本の戦国時代が終り、明確な勝者として武将徳川家康が台頭してくると、日本におけるキリスト教の終りが告げられた。キリスト教禁止令が出されて数年のうちに、キリスト教徒達は、ユダヤ人がヒットラーの軍隊によって一斉に捕えられ鉄道で強制収容所に連行されたように、捕えられて大八車に乗せられ長崎に連行されて、何千人もが拷問され殺されたのである。

その頃、多分に死の血盟団要員らの影響を受けた徳川家康や他の大名らは、通俗的にキリスト教を「南蛮人の宗教」とみなし、この「蛮人宗教」の献身的な隠れ信者が発見されると邪教の罪で火あぶり、はりつけ、水攻めなどの刑に処するのが常であった。

5. 秘密計画

「私は、国務長官スティムソンに日本のどこが軍需生産に力を入れているのかと訊ねた。彼は、直ぐに、多々ある中で広島と長崎の名を上げた。」(ハリー・S・トルーマン大統領)

チャールズ・スウィーニー少佐は、広島と長崎の爆撃に両方とも参加した。何年も後に、スウィーニーは、彼の著書『戦争の終焉』の第 1 章冒頭で、文言入りの文章を記して死の血盟団の影響を明らかにした。そこで「爆弾は、組立小屋の中の架台にコンクリート座床から最低点で 6 インチ最高点で 66 インチの高さで据えられていた」と書いている。スウィーニーは、長崎が主要目標であったことや原爆が日本を 21 世紀世界統一政府の掌中に導入するために使われることを知る必要はなかった。スウィーニーのように多くの者は、疑問を

抱かず命令に従い、しばしば戦闘部隊がそうであるように任務の由来や最終目的を理解することなく命令に従うだけで、使い捨てにされる要員であった。

スウィーニー少佐は、広島には主要な軍需工場があり如何なる侵攻に対しても防衛できる第二方面軍の本部があったので原爆投下の目標になったと書いている。又スウィーニーは、新潟が日本の戦争継続に不可欠な工業生産地であったので当然そこも主要目標になっていたであろうと述べており、更に、もう別の高い軍事目標となっていた京都は、その宗教施設が日本国民にとって非常に重要であるが故に陸軍長官ヘンリー・スティムソンによって標的リストから外されたのだと記している。

スティムソンは、イエール大学で秘密結社スカル・アンド・ボーンズに入会して 1888 年に卒業して、1945 年には、死の血盟団の幹部指導者となっていた。長崎よりはるかに大きな軍事的重要性をもつ複数の目標が標的リストから外され、日本キリスト教の総本山（訳注＝原文では the Japanese Christian Vatican）長崎が、スティムソンにより死の血盟団のために加えられたのである。

広島に対する原爆投下の公式説明では、1945 年 8 月 6 日に広島への正確な爆撃ができな場合は小倉市が第二の目標であったとのことであるが、広島にウランウム原爆（訳注＝原文では当時の暗号名を使った Little Boy atomic bomb）が投下された後の公式説明では、小倉市が次の原爆投下の第一目標になっていたとされている。この隠蔽工作の作り話は、アメリカ政府が小倉市上空の天候不良のために（デブ男）と呼ばれた第 2 原爆は長崎を標的にしたのだと云って長年巧妙に吹き込んできた説であった。グローヴズ大將は、「小倉では、気象観測機（訳注＝原文では単数での the weather plane）の報告に反して有視界爆撃が不可能だと分かった」と書いていた。しかし、真相は、「デブ男」原爆搭載機の先を飛行した気象観測機（訳注＝原文では複数の the weather planes）の搭乗員たちによって小倉市上空の視界は良好と確認されていたのである。

死の血盟団の影の手を世間から隠すために、公式見解は、小倉市上空を覆った雲のせいで同市への原爆投下ができなかったとし、挙げ句の果ては隣りの八幡市から出た大気汚染煙が小倉市を救うことになったのではなかろうかと云って民衆をたぶらかしてきた。

しかし、事実はきわめて複雑である。以下は、1945 年のあの忌まわしい日につながる諸々の出来事を順序立てて説明するもので、恐ろしい出来事の時系列的真相である。

最後の秒読みが始まると、マンハッタン計画の名士らの群集の中で軍関係者でもなくロス・アラモス国立研究所の科学者でもない一人の男がひとときわ他の者たちから目立っていた。その男の名前はウィリアム・ローレンスで、彼は死の血盟団の高級幹部であった。

1945 年 7 月 16 日の早朝 4 時 45 分、150 人余りの一団が立ちプルトニウム爆弾の初実験を息を殺して待っていた。その中にはロス・アラモス研究所長のジュリアス・ロバート・オッペンハイマー、実験責任者ケネス・ペインブリッジなど数多くの主要な研究者や軍幹部がいた。そこにもう一人、ニューヨーク・タイムズ紙のウィリアム・ローレンスと云う名前で不可解にも報道記者団の一員として選ばれた男がいたのである。ローレンスは、元々レイブ・ウルフ・スーと云う名前のリトアニア人で、レスリ・グローブス将軍がバーナード・バルークに命じられてニューヨーク・タイムズに託した死の血盟団要員であった。彼は、偽情報工作員としてうまく働き多くの宣伝記事を書いて「アトミック・ビル」のニックネームを得ていた。

彼の最初の欺瞞工作は、「三位一体爆発」についての新聞発表であろう。キリスト教では「聖なる三位一体」は父なる神・子なる神・精霊であり、要するに「生きるもの全ての力」を表わす語句であるから、原爆実験を「三位一体爆発」とするのは神を冒瀆する表現である。神が創造したもの全てを破壊する力を持つ爆弾を「三位一体」と呼ぶのは、明らかに攻撃的な侮辱であった。

現地時刻 5 時 29 分に原爆装置は爆発させられた。TNT 火薬換算で 20 キロトンほどの威力を持つ爆弾は、砂漠に深さ 10 フィート、直径 1,100 フィートの放射能を帯びたガラス

状の窪地を残した。爆発の際には周囲の山が1～2秒間「日中より明るく」輝き、観測基地では熱気が「オープンと同じくらい熱かった」と報告されている。爆発の衝撃波は100マイル以上遠方まで轟き、きのこ雲が7.5マイルの高さにまで達していた。この「三位一体爆発」を目撃したロス・アラモス国立研究所長J・ロバート・オッペンハイマーは、実験を見つめながら、ヒンドウ教の聖典バガヴァド・ギーターの詩句「我は死なり世の破壊者なり」が心に浮かんだと後に述べている。

ローレンスは、不可解にも、通常では国家機密事項の取扱許可も得られない外国人であるにも拘わらず、数週間後に広島と長崎への原爆投下飛行に参加する許可を得た唯一の民間人とされた。ローレンスは、広島爆撃に向かうB-29爆撃機に同行する観測機に搭乗する許可を得ていたが、搭乗機の出発に間に合わず当の爆撃機が離陸するところしか見られなかったと述べている。しかし、ローレンスは民間人として軍法会議にもかけられず何ら処罰も受けなかったのである。

原爆投下作戦に参加した者は、各自が非常に特殊な役割を受け持った。死の血盟団にとって、ローレンスの極秘長崎作戦は、陽動作戦ではあるが危険な広島爆撃に彼を参加させるには余りにも重要すぎた。死の血盟団の要員は非常に狡猾で、当時の幹部らは「リーダーシップ法則」と呼ばれたマーケティングの原理を理解していた。このマーケティング原理によると、人々は新しい分野での初めての出来事は記憶に留めるが、同じ分野での二番目の出来事になると最初の場合ほど注意を払わない。例えば、ニューヨークからパリまで最初に単独飛行した人の名前を問われると、多くの人は正解のチャールス・リンドバーグを答えられる。しかし、大西洋を二番目に単独飛行した人の名前を問われると、殆どの人は答えを知らないであろう。この原理を理解することは、なぜ広島を最初の目標にすることで実際はそれが真の目標を隠す陽動作戦上の目標になるかを理解する決め手になる。

他方、ローレンスは、広島への飛行を逃すことによって、密かに血盟団のために長崎を主要目標とする作戦を担っていた陸軍長官ヘンリー・スティムソンからの極秘命令を作戦機に伝達する役目を遂行できたのである。原爆投下作戦機の機長チャールス・スウィーニー少佐や他の殆どの搭乗員は、ローレンスが担った特別の任務を決して知ることはなかった。原爆投下の責任者である上官のアシュワース中佐のみが陸軍長官スティムソンの極秘命令書を見ればよかったのである。

やがて、死の血盟団の新兵器が、ほんの一秒たらずで、それまで他の者たちが何世紀にもわたって試みてきたこと、即ち日本のキリスト教を跡形もなくなるほどに潰してしまう作業を遂行することになる。小倉市上空は快晴で良好な作戦天候であるとの報告を受けていながら、アシュワース中佐が命令に反してレーダー使用で原爆「デブ男」を投下するのを許可しなかったので、スウィーニー少佐らの作戦機は小倉周辺を三度旋回した。すると、アシュワースは、スウィーニー少佐に爆撃機を長崎へ向かわせるよう命じた。奇妙なことに、その時彼は、それ以前の命令とは裏腹に、スウィーニーと爆撃手に「レーダー使用を準備せよ」と命じたのである。アシュワース中佐はこの作戦の指揮官であったので、スウィーニー少佐と爆撃手は、この新たな指令が標的の目視確認なく原爆投下をしてはならないと云う極めて明確な本来の命令に反することを知りながらもアシュワースに従った。

長崎上空は6,000フィートから8,000フィートの高度で80～90%の積雲が覆っていた。そこで長崎での標的にレーダーの照準を当てたことは、予めアシュワースが日本のキリスト教の中心地を主要な爆撃目標に特定したレーダー使用の極秘命令を受けていたかのように行動したことを示している。「ボックスの車」として知られたB-29爆撃機が爆弾投下口を開けると、爆撃手のカーミット・ビーハンが雲の切れ間に一瞬長崎が見えたと言を上げた。その時ビーハン「見つけたぞ! 見つけたぞ!」と云って、午前11時1分に原爆を投下した。

11時2分、原爆「デブ男」が爆発した時には、長崎の街の大半が一瞬にして壊滅し、推定73,884人が殺されたのである。最初の犠牲者の中には、連合国軍捕虜、日本のキリスト教徒、奴隷化された1万人以上の朝鮮人たちがいた。カトリック大聖堂の上空での爆発は、

即座に、事態の公式説明の何かが明らかに間違っていたことを後日この戦争犯罪を調査することになる人達に示す決定的な証拠になった。長崎の収容所に抑留されていた戦争捕虜たちは、極悪状態の中で生き残ろうとしていたのに監視の日本兵らもろとも焼き殺されたのである。

原爆「デブ男」は、トルーマン大統領が述べた公式の投下目標地点から非常に離れたところで爆発していた。この原爆計画に係わっていたオッペンハイマーたちは、二発の原爆が主として民間人を対象に使われる場合と方法について騙されていたことに気づいた。

長崎に対する原爆投下の後、死の血盟団の職員らは、この原爆投下の真相を隠蔽する世論工作を開始した。これには、長崎を原爆投下の標的にした決定責任をロス・アラモスの標的委員会になすりつけ、この委員会に公の関心を集中させる宣伝工作もあった。

「原子爆弾の父」として知られる J・ロバート・オッペンハイマーは、マンハッタン計画の科学指導者であった。しかし、彼は、公的にはロス・アラモス標的委員会の委員長ではあったが、決して長崎を標的に勧めることはなかった。むしろ、死の血盟団やそのキリスト教壊滅計画を知らずに務めていた他の多数の者達と同様に、オッペンハイマーは、原爆「デブ男」を爆発させたところが長崎であったことを知った時には本当に驚愕したのである。長崎の町が崩壊した後、オッペンハイマーは、トルーマン大統領と会い、「大統領、私は自分の手に血糊がついているような感じがします」と述べた。

オッペンハイマーが長崎についての衝撃を訴えていた頃、米国陸軍の対日諜報専門員でオッペンハイマー委員会の一員として務めていたエドウィン・O・ライシャワーが小倉と長崎を標的にする上で決定的な役割を果たしたとの偽報道も流された。しかし、結局戦後には秘密拘束も解かれることになり、ライシャワーは、レズリー・M・グローヴス将軍のように自叙伝の中で、長崎を壊滅させる決定を下したのは陸軍長官 **ヘンリー・ルイス・スティムソン** であったと暴露した。

スティムソンは、グローヴス将軍に対して「これは私自身が解決すべき問題だ」と云った。歴史上の記録では、長崎を第一ないし第二の原爆投下目標に選んだのはオッペンハイマーでもライシャワーでもなく又グローヴス将軍でもなかったことは明確である。死の血盟団が望み且つ意図したように、偽の投下目標の選択は死の血盟団の幹部要員が長崎を選んだ事実から世間の関心をそらす働きをしたのである。

ハリー・S・トルーマンは、フリーメイソン高級幹部であり第 33 代アメリカ合衆国大統領でもあった。又、ヘンリー・ウォレスもフリーメイソン高級幹部で第 33 代合衆国副大統領であった。賢人「バーナード・バルークや「ボンズマン」(訳注=秘密結社 **Skull and Bones** 成員の別称) の陸軍長官ヘンリー・スティムソンと一緒に、死の血盟団が原爆作戦の指揮系統を牛耳っていた。

ウィリアム・ローレンスは、長崎が破壊された後で、「デスティニーが長崎を最終標的に選んだ」と書くことになる。死の血盟団の信条では、「デスティニー」(destiny) は血盟団員間の任務や関与をやり取りする文書に使われるので、ローレンスがこの「デスティニー」なる言葉を使ったことは極めて意味深長である。

なお、死の血盟団は、広島への原爆投下後も日本指導部がどうしても直ちに降伏できないように動いた。フリーメイソンのカーチス・ルメイ大將は、8 月 7 日に 152 機の B-29 を、8 月 8 日には 375 機の B-29 を出撃させて日本の諸都市を焼夷弾爆撃したのである。

他方日本側では、切迫した情勢下で 8 月 9 日に当時の国家指導者らが急遽集し最高戦争指導会議・閣議・御前会議と密議を重ねて遂に降服やむなしとポツダム宣言の受諾を決め、翌 8 月 10 日に連合国側にそれが伝達された。

原爆投下のような極めて恐ろしい行為に対して一様にアメリカ市民を責めるのは甚だ不当であろう。海軍大將ウィリアム・D・リーヒーは、原爆の使用を強く非難した多くのアメリカ人の一人であり、次のように述べている。「この新兵器を爆弾と呼ぶのは間違いである。それは、爆弾ではなく如何なる爆発物でもない。それは、本来の爆発力によるよりも、

その致命的な放射能反応で人々を殺す有害物質である。それを最初に使うことによって、我々は暗黒時代の野蛮人に共通する倫理基準を採用してしまったと私自身は感じている。私は、このような仕方戦争することを教えられなかったし、婦女や子供を殺傷することで戦争に勝つことはありえない」と。多くの人々にとって聞きづらいことではあろうが、原子爆弾は第二次世界大戦を終わらせるためやアメリカ人兵士らの命を救うためには必要でなかった。それどころか、原爆は、日本のキリスト教を根こそぎにして死の血盟団の「新世界秩序」計画を押し進める助けにするために開発使用されたのである。

長崎の爆心地記念碑を訪れる人は、ゼロ地点（訳注＝核爆発真下の地面）が浦上天主堂の彫像の直ぐ左側になることが分かる。公式に予定されていた核爆発地点は天主堂から約 2 マイル南であったので、この実際の爆心地こそが明白な証拠である。このことは、現地作戦命令書 17 号（訳注＝原文では Field Order No.17）及び長崎原爆投下目標地図で裏づけられる。又、スウィーニー少佐ら爆撃機搭乗員たちが、正しく定められた標的から 500 フィート以内での爆発とされている直撃であったと報告している。この公式標的から 2 マイルもはずれている事実をどう説明するのか。

その答えは、浦上天主堂が秘密裏に定められた本当の爆心地であったが故に、スウィーニー少佐ら当の爆撃機搭乗員らは標的直撃を報告したのである。公式の爆撃目標地図や現地作戦命令書 17 号などは、人々に三菱の軍需工場を標的にしたのだと信じこませるために作られたものであった。

フリーメイソンのトルーマン大統領、ウォラス副大統領、ダグラス・マッカーサー將軍、ハップ・アーノルド將軍、カーチス・ルメイ將軍、そしてスカル・アンド・ボーンズのスティムソン陸軍長官はバナード・バルークに仕え、そのバルーク自身は更に死の血盟団最高幹部会に従う者であった。

こうして、死の血盟団は、原爆投下目標を決定する指導部の主要な部署を確保することによってわずか数秒で、日本で過去 500 年間にキリスト教を迫害する者たちがなしえたよりも多くのキリスト教徒を殺害したのである。

確かに、我々は、人間として、原爆の破壊力と被爆死者数を目の当たりにすれば、一体どのような人間がこうした事態を引き起こせるのかを問わねばならない。更には、血の誓いを交わして死の血盟団に仕える者たちに原爆の開発使用の主要な地位を占めさせ、今日なお、そうした権力の座を支配させ続けていることを、我々はどのようにして知らないで済まされようか。

6. 朝鮮の分断

「自然との永続的な調和の下で人類を 5 億人以下に維持せよ。」（ジョージア道標石）

朝鮮がどのようにして分断されたかについては、偽りの説明が多く、多くの学校で教えられている。学生たちは、第二次世界大戦の終了時にトルーマン大統領の部下らが朝鮮を余り重要視しなかったからだと説明される。こうした解釈は、アメリカ政府が当時フィリピンと日本の戦後処理に圧倒されていたので朝鮮の信託統治を引き受けたくなかったとの説明にもなる。その結果、二人の軍当局者デービッド・ディーン・ラスクとチャールズ・ハートウェル・ボーンスティール 3 世が、朝鮮を南北に分断する決定を下し、その後このラスクとボーンスティールの分断案が、日本の占領行政を指令する一般命令 1 号の一項目として実施されたのだとされる。

何故アメリカが朝鮮を分断したかについて、この偽りだが公式の説明は、北朝鮮と南朝鮮が政策意図によるのではなく偶然に作られたとする。しかし、真相は、朝鮮が世界統治計画を押し進める死の血盟団要員らによって分断された事実である。死の血盟団は、朝鮮

を非常に特殊な理由で分断しようとした。まずは、「冷戦」（これはバーナード・バルークの造語であるが）を発生させるのに役立つことで、これはソ連内部の血盟団要員らがソ連に原爆を持たせることで可能になる。次いで、第二次世界大戦の終了後 5 年を経ても、朝鮮に局地紛争ないし戦争を起こさせることで米国の「防衛費」を高く維持できる。第三の理由は、分断朝鮮が第三次世界大戦を起こさせる死の血盟団の 21 世紀計画に役立つことである。

正確な説明は、バーナード・バルークら死の血盟団要員が世界的にうまく「冷戦」概念を定着させたことなどの諸事実に示されている。彼等は、首尾よくアメリカに 1950 年から 1953 年にかけて朝鮮戦争をやらせる工作をした。更に、彼等は、アメリカ政府に多額の軍事費支出を継続させるべく世論の支持を勝ち取ることに成功した。人々が偽りの歴史を受け入れ続けている限り、死の血盟団は、第三次世界大戦によって更なる甚大な苦難を朝鮮にもたらすことになるだろう。

死の血盟団は、歴史の教え方を統制し、朝鮮分断の由来について偽りの説明をさせる代弁者らを支援してきている。そこでは、ラスクやボーンスティールは誰に仕えていたのか、38 度線の重要性は何か、何故ドイツは日本へウラニウムを送っていたのか、そして何故長崎で 1 万人以上の奴隷化された朝鮮人が原爆によって殺戮されたのかなど、真実を隠蔽するために歴史上の数々の側面が一般的に歪曲されているのである。

〈 死の血盟団奉仕 〉

ラスクは、アメリカに朝鮮とベトナムで戦争させた工作でよく知られている。彼の幾つかの血盟団偽装組織との関わりは、ローズ奨学生となり 1933 年に血盟団のセシル平和賞を受けるなどした学生時代にさかのぼる。ラスクは、1950 年から 1961 年までロックフェラー財団の理事となり、又外交問題評議会の一員でもあった。

チャールズ・ハートウェル・ボーンスティール 3 世も、ローズ奨学生であり外交問題評議会の一員であった。彼は、1931 年にウェストポイントのアメリカ陸軍士官学校を卒業し、死の血盟団に対する貢献で報賞されて四つ星将官（訳注＝大将の階級）で退職した。

〈 38 度線の重要性 〉

日本の原爆開発計画は、一般に知られていないが確かな史実である。1934 年には東北大学の広坂忠義教授が原子爆弾を作る可能性を説明した「原子物理理論」を公表している。当時日本には「二号」と「F 号」と呼ばれた二つの主たる原子力開発計画があり、仁科芳雄博士が理化学研究所で二号計画に取り組み、荒勝文作が京都帝国大学で F 号計画を指導した。

死の血盟団は、日本占領管理の一般命令 1 号が出される前に 38 度線以北の朝鮮で日本の原爆開発計画施設が設定されていたことを米国市民に知らされたならば、ソ連に核開発技術を与えることになるのを恐れた一般市民の抗議が朝鮮を南北 2 国に分断するのを押し止めることになるだろうと結論した。

更に、この特殊原子兵器の製作関連場所の存在は、何故、日本が長津発電所ダムを建設したり、1950 年 11 月 27 日から 12 月 13 日にかけての凍結した長津での戦いでアメリカ軍が不名誉な敗北を喫したのかについて手がかりを与えてくれる。凍結したチョシンでの戦いでアメリカ軍兵士らは、F 号計画の施設となった興南地域の山岳施設を再発見している。

日本の原爆開発計画の主要部分がソ連邦の手に渡るようにと、まずは 38 度線に沿って朝鮮が分断され、その後 1953 年には軍事境界線としてそれが固定されたのである。

〈 ウラニウム輸送の理由 〉

ナチス・ドイツの日本へのウラニウム輸送と日本の原爆開発計画は、一般に知られていない。日本の原爆作りの作業は、京都大学でのサイクロトン設置を成功させた後、あらゆる入手可能なところからウラニウムを入手することが必要であった。朝鮮北部でのウラニウム供給源が、実際の原爆資材を開発する施設を日本の本土外に求めた理由の一つである。又、興南地域が選ばれた別の理由としては、長津ダムが膨大な電力供給に適うことと、日本本土を核爆発実験による放射線被害から守るためであったろう。

更に、日本の陸軍と海軍は、日本、ビルマ、中国でウラニウムを見つけていた。朝鮮北部は、最も有望なウラニウム供給源の一つであることが分かっていたが、より多くのウラニウムが必要であった。そこで、ナチス・ドイツは、金、生ゴム、アヘン、キニーネ、その他戦争継続に必要な資材との交換でウラニウムを日本に提供することになったのである。

ドイツの日本へのウラニウム輸送の試みは、米国政府の文書で記録されている。ウラニウム 235 は、1945 年 8 月 6 日に広島上空で爆発した原爆「チビ少年」（訳注＝「デブ男」と同様にウラニウム爆弾の形態から呼ばれた暗号名 Little Boy）に使われた核物質である。マンハッタン計画は、この原爆「チビ少年」にナチスのウラニウムを使用していたかも知れない。根拠となる証拠は、少なくとも、アメリカ海軍によって捕獲されたドイツの U ボート 1 隻の積み荷が日本へ輸送しようとしていたウラニウム 235 であったことである。ウラニウム 235 は、ウラニウムの爆弾用濃縮度アイソトープであり、高濃縮ウラニウムとして知られている。日本へのウラニウム 235 の輸送は、ドイツではウラニウム 235 の開発はなかったとする現代版歴史に反するが、ナチスのウラニウム爆弾開発計画は、米国が二つの非常に異なる種類の爆弾、即ち 1945 年 8 月に日本で落されたプルトニウムとウラニウムの原爆をどのようにして持つに至ったかを説明するものかも知れない。

U-234 号と呼ばれたドイツの U ボートは、日本へウラニウム輸送途中の 1945 年 5 月 14 日に U.S.S. サットン（訳注＝アメリカ海軍の駆逐艦）に降伏した。米国政府の公式報告では、ドイツの潜水艦 U-234 号から没収したウラニウムについてはマンハッタン計画当局に報告されただけでロス・アラモス現地へは送られなかったとされている。この公式報告では、ドイツのウラニウムはブルックリンの保管庫に収納され、広島へ投下した原爆には使用されなかったとされている。死の血盟団に仕える者たちをも含めて歴史家連中は、U ボート U-234 号が輸送していたのはウラニウム 235 ではなく酸化ウラニウムであると云って、うまく大勢を信じこませている。しかし、U-234 号の海上での降伏は、ヨハン・ハインリッヒ・フェーラー中尉によって指揮された同艦が金で裏打ちされた円筒にウラニウムを入れて運んでいたのも、死の血盟団には幾つかの問題を引き起こした。容器を金で裏打ちしたのは、ウラニウム 235 からの放射線被曝を防ぐために必要であったからで、それは米国政府の公式説明のような不活性の酸化ウラニウム輸送には使われないのである。原子炉で濃縮されない限り酸化ウラニウムは放射線を出さず、従って金で裏打ちされた円筒容器は不活性な酸化ウラニウム輸送には必要ないのであるから、U-234 号の金で裏打ちされた円筒容器は極めて重要である。直接の目撃証人ヴォルフガンク・ヒルシュフェルディス（Wolfgang Hirschfeldis）は、1997 年の著書『ヒルシュフェルディス—U ボートの秘密日記』（Hirschfeld : The Secret Diary of a U-boat）の中で、「U-235」とペンキで表記された円筒体に「U-粉末」の積み荷を見たと言っている。

ウラニウム 235 を使った広島投下爆弾の完成以前にアメリカの所有となったドイツのウラニウム 235 は、およそ 7.7 ポンドであったと計量された。米国政府の公式見解では、この濃縮ウラニウムを全量使っても爆弾「チビ少年」の実験と広島で爆発させる爆弾用には不十分であったとされている。しかし、ドイツが日本へ U ボートでウラニウム 235 を輸送しようとした事実は、ドイツが少なくとも爆弾一発分の核分裂物質を有していた証拠を確かにするものである。

当時日本の潜水艦 I-52 号がドイツで受け取り日本へ持ち帰ることになっていた酸化ウラ

ニウム 500 キログラムと恐らく一緒に積荷されていたであろう多少のウラニウム 235 に関する秘密は、今日もなお隠されたままである。I-52 号は、1943 年に日本の呉海軍造船所で建造され、燃料補給なしで 300 トンの積荷を 21,000 マイルも輸送できるように設計されていた。1944 年 3 月、I-52 は、宇野甲雄艦長、士官 11 名、下士官兵 84 名と乗客 14 人を乗せて呉港を出発して、途中シンガポールに寄港し生ゴム 54 トン、阿片 2.88 トン、キニーネ 3 トンを積み込んでいる。その後、この I-52 号には金 2 トンが積み込まれていたことも、解読された日独間の通信によって確認された。

1944 年 6 月 23 日に、I-52 号は、クルト・ランゲ大尉が指揮するドイツ潜水艦 U-530 号と会合することになっていた。この会合の通信連絡がアメリカ軍諜報部によって傍受され、A・B・ヴォセラー大佐が指揮する護衛空母 U.S.S.ボーグが両潜水艦を空爆するために急派された。ジェスイ・テイラー少佐が U.S.S.ボーグから発進して約 55 マイルの海上で I-52 号と U-530 号を発見して攻撃し、日本の潜水艦は被弾して大西洋に沈没した。U.S.S.ボーグは、ウィリアム・フラッシュ・ゴードン大尉が指揮する次の攻撃機を発進させて、その魚雷攻撃で U-530 号も撃沈させた。I-52 号と積荷の金の損失は、当時日本のベルリン駐在海軍副武官の藤村義和によって確認された。その際、藤村は、「金を失ったことは辛いがないが、100 人もの水兵たちを失ったことは残念だ」と語っている。

深海沈没船引揚げ作業の専門家ポール・ティドウェルが、国立公文書館で I-52 号が金 2 トンを積み込んでいたことを確認した解禁文書を読んだ後、1995 年に当の沈没艦を見つける作業を始めて現在も続行しているが、未だ金が回収されたとの報道はない。

要するに、日本の原爆開発計画は、アメリカのマンハッタン計画よりかなり遅れてはいたが、1945 年の時点ではヨセフ・スターリンにとって大きな価値があった。スターリンは、死の血盟団に仕えてはいたが、原爆製造に必要な技術や資材をアメリカから与えられることを 1945 年には確信できなかった。『ジョーダン少佐の日記から』と題する本は、死の血盟団要員のハリー・ホプキンスがソ連政府に原爆製造に必要な計画と資材を受け取らせる手配をしたと記述している。ホプキンスは、トルーマン政権がスターリンに国家最高機密である原爆情報を届けるのに使った人者であるとジョージ・ジョーダン少佐が暴露したのである。

7. 暗殺－如何にして秘密が守られるか

「暗殺は検閲の極端な形態である。」(ジョージ・バーナード・ショウ)

宣伝工作が失敗して真実が漏れ始めた時には、暗殺者が動き出した。二つの極秘計画、アルソス工作とブラッド・ストーン作戦の存在が 1976 年の米国議会上院チャーチ委員会の調査で判明した。ボリス・セオドール・パッシュ大佐は、マンハッタン計画の主任防諜要員であり、アルソス工作とブラッド・ストーン作戦の責任者でもあった。彼は、1976 年の C I A 要員らによる不法殺人事件について米国議会上院議員らに尋問されているが、これは、死の血盟団が議会の調査を制しきれなかった稀な事例の一件である。

チャーチ委員会による死の血盟団に対する損傷が余りに大きかったので、フリーメイソン団員で時の大統領ジェラルド・フォードは急遽スカル・アンド・ボーンズ成員のジョージ・H・W・ブッシュを在中華人民共和国米国連絡事務所長から C I A 長官に移動させることになった。そこで、ブッシュは死の血盟団のために事態の収拾を図る任務を与えられたのである。

死の血盟団に仕える歴史家らは、多くの理由でパッシュの活動を秘密にしておきたいと望んでいる。パッシュは、血盟団の秘密を明かした人々たちを沈黙させる任務を担った主要人物の一人であったし、彼が指揮した暗殺計画のブラッドストーン作戦は、非協力的な科

学者たちや血盟団の秘密を暴くような真つ当な人々を排除したのであり、そうした秘密の中には日本のキリスト教を潰す計画なども含まれていた。

5人編成のブラッドストーン作戦「清掃人チーム」は、証拠隠滅を図る暗殺者集団で、PB/7と呼ばれた。死の血盟団が問題視した人たちの多くは永久的に黙らされたが、血盟団にとって人格暗殺が著名な地位身分にある者を引き落とすのにしばしば理想的な方法であった。パッシュの最も知られた人格暗殺の一つは、J・ロバート・オッペンハイマーを共産党同調者として告発して抹殺した事件である。作家のクリストファー・シンプソンは、「世間によく知られた1954年の治安事件でオッペンハイマーの運命に封印させたのはパッシュ大佐の証言であった」と述べている。

それにしても、日本帝国軍隊の犯罪行為やその他第二次世界大戦中のおぞましい出来事は、映画・本・コンピューターゲームなどで広く宣伝されてきたが、第二次世界大戦を舞台とする映画・演劇・小説・テレビゲームなどで、こうした前代未聞の卑劣な行為、破壊した人々を更に押し潰す残虐行為、広島や長崎への原爆投下のように人間がこれまで犯した最も短時間の大量殺人行為などには最近まで全く触れられていないのは不可解な事実である。

悪魔が弄した最悪の詐術は、世界中に悪魔は存在しないと信じこませたことだと云われてきた。しかし、今や本当の問題は、実際に組織された邪悪が存在することを知った以上、それに対して我々自身が何をなすべきだと思ひ望むかである。

8. 未来

「暗闇は暗闇を追い払うことができない。光だけが暗闇を取り除けるのである。憎しみは憎しみを追い払うことができない。愛だけが憎しみを追い払えるのである。憎しみは憎しみを増やし、暴力は暴力を増やす。そして、強さは破壊の下降渦巻きの中で強さを増し、憎しみが憎しみを生み、戦争がより多くの戦争を生むような悪の連鎖反応は、粉碎されなければならない。さもなくば、我々は絶滅の暗く深い穴に落されるであろうから。」(マーティン・ルーサー・キング 2 世博士)

長崎の秘密、罪なき人々の無情な殺戮、原爆を使って日本を凶悪な世界統一政権の第三地域に落とし入れようとしたことなどを知った今、我々は、自分たちが一つの扉の前に立っていることが分かる。そこでどうするか、一つの選択は、扉を閉じたままで、見て見ぬ振りをして過去を忘れ、闇の力に日常を支配され続けながら、彼等の悪の計画や策略の犠牲にならないよう或いは長崎・広島・ホロコーストのような出来事の被害者には決してならないであろうとの偽り希望を抱いて生きることである。

しかし、もう一つの選択として、扉を開いて中に入り、多少の勇氣と粘り強さを持って死の血盟団に立ち向えば、奴等を打ち負かすことが出来るのではないか。我々は、闇の権力の存在を知り彼等の行動を暴露することによって、アメリカ国民に、これは彼等自身や彼等の両親、或いは彼等の祖父母たち、はたまた彼等の国が犯した罪ではなく、それは地球人口の0.001%にも及ばない連中の集団が犯したことであり、奴等は未だ厳然と邪悪の意図をもって存在するが、我々が一緒になって立ち向えば奴等の邪悪な行動を阻止できることを伝え知らせるのである。

長崎自体が、これを証明する事実である。丁度イエス・キリストが十字架から立ち上ったように、長崎は灰壚から立ち上がり再び繁栄を続けている。日本では、キリスト教徒は19世紀まで迫害されたが、その後は第二次世界大戦以前でも少なからぬキリスト教徒の総理大臣を輩出するなど、信仰の自由を享受した国であった。このことを知ると、欧米諸国の人々は驚くのである。

今日までのところ、日本はキリスト教徒の首相を 8 人も輩出している。又、原爆でキリスト教徒が酷く犠牲になったにもかかわらず、キリスト教は復興を続けてきた。現在日本でのキリスト教徒は約 300 万人であると推定されている。

アメリカ先住民たちには次のような名言がある―「世界は我々のものではない。我々は唯我々の子供たちからそれを借りているだけなのだ」と。

長崎の秘密を知ることによって、我々は、偏ったメディアにより供給される腐敗墮落した政治家らの虚言や宣伝が、如何に我々を駆り立てて他の人々を殺戮し破滅させることができるかを知らされるのである。これは明らかに間違っており許容されるべきではない、と我々は心の底から判断する。我々が全ての人の命を尊重することを学べるならば、我々の子供たちも同じようにできるであろうことを我々は知っているのである。